
東方武想録 ～Find of the exotic people～

擬似連

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方武想録 ～Find of the exotic people～

【Nコード】

N4883S

【作者名】

擬似連

【あらすじ】

inspection of the Eshelon system

『エシロンシステムの閲覧』

受信、陸上幕僚長『久箱義文』 所在不明隊員の措置 前々日、陸上自衛隊結城演習場にて隊員一名が所在不明 またこの失踪について

て、『不鮮明な情報』が多い 30 時間後、『脱冊』として処理

一章 妖怪の弾幕、自衛官はリアル弾幕

「エシロン？ってこれは…

紫さん、アメさんにもバレてるらしいね」

デスクを陣取っている男の声が響いく

ここは簡素……と言うより無機質な部屋だった

部屋の壁はコンクリートが剥き出しで家具も必要最低限の物しかなく、生活感が乏しい

しかし、デスクの上には数個のPCと無数の周辺機器に蹂躪されており異彩を放っていた

照明も付けず、PCの画面しか光源が無いためやや薄暗い

「も、申し訳ありません

座標、個人情報のみを捕捉してしまい…」

男の後ろに控えていた女が、額から一筋の冷や汗を垂らしながら謝罪の言葉を口にする

吐いた台詞のわりに飄々とした風情を崩さない男に反し、女は随分恐縮し、低頭している

「ああ、いやゴメン
別に責めてる訳じゃ……」

男はどちらかと言えば世間話でもするつもりで話し掛けたが、本人にとっては痛烈な皮肉に聞こえたらしい……

「まあ、まだ時間は有るから……
まずは的場君の実力を探ってみようじゃないか」

男は気まずい空気を壊そうと、先程『紫^{ゆかり}』と読んだ女に優しく声をかけた

紫はゆつくりと頭を上げると、幾分落ち着いた様子で男に返事を返した

「ありがとうございます
では……失礼いたします、『神主』様」

A・D・2010 5/17 09:32

MATOB A's side |

「チツ……」

俺は地面に俯せに倒れたまま、しかめっ面で舌打ちをかました

斜めにズレた鉄帽を直すと、辺りを見渡す

……草木しかないじゃん

あの独特に纏わり付く…しかし不快ではない草木の臭いが鼻につく
そして右手の甲にはよくわかんない虫が、不快な足音をたてて這い
ずり回ってやがるぜ畜生

ゆっくり立ち上がり、防弾チョッキについた土と虫を払い除ける

何処ここ？

状況が変わる訳じゃないが、再び意味も無く辺りを見渡す

まだ混乱真っ最中の頭を無理矢理働かせ、記憶を引きずり出しなが
ら腕時計を見る

？昨日、演習場に来る

？今日の0900状況開始が告げられた
OK、OK、ここまでは覚えてる

？で、高機動車に揺られて爆睡しながら防御陣地に前進

？一瞬浮遊感の後、気が付いたら此処にいた

ぶっ飛んでやがる

？から？の間に何があった！？

取り合えず、そのまま二分程何もせずに放心

ってか、ぶっ飛んでんのは俺の頭か？

物理法則か？

段々と苛立ちが焦燥に変わって行く

それを抑える様にタバコを取り出し火を付ける

ついでに携帯も取り出して画面を凝視するが、無情にも『圏外』の文字が俺の心をえぐる

ヤバイ…ヤバイよ

まさか寝てる間に車外へ放り出されたのか！？

むしろ頭も物理法則も正常だとすれば、やはり放り出されたと考えるのが妥当

ヒデーな畜生…

どうしろってんだ、俺演習場の地理なんて分かんねえよ！

「厄日だ…」

俺は讒言の様に呟くと、ザッと装備と銃の点検を終える

そして近くに転がっていた背納と雑納等の鞆類を背負い歩き始めた

まあ、未開の地じゃあるまいし

そのうちどっかの陣地に出るだろ

そしたら自分の部隊教えてもらおう

クソ恥いけど…

俺は重い気分のまま歩き出す

フル装備に背納か…

重いのは気分だけでは無いようだ

change over

不可解な事は連続的に起こるのだろうか？

そんな事を考えながら空を見上げる

雲一つ無い快晴

何て気持ちの良い天気なのだろうか…

「おいコラ

聞いてんのかい？

人間さんよお！」

ああ、全てを投げ出して街に繰り出したい
パチンコしたい

「はん、僕らを畏れて現実逃避してんじゃないか？」

……確かにお前らのせいで逃避してたが、怖いからじゃ無くてウザ
つたいからだよ

「ああ、成る程！

解ってるねえ、人間君

人は俺達ヨウカイを畏れ敬うもの…君の反応は正しいのだ」

ようかい？

何だそれ

溶解…容喙……ヨウカイ…

妖怪？

『人は俺達妖怪を…』

まさか、とは思うが…

「あの、ヨウカイって……あの人外で、人を襲う…」

俺は半信半疑で問うと、彼等は胸を張りながら偉そうに頷いた

「はあ？

当たり前だろ

そんな事もしらんのか、人間？」

「中二病かよ……」

俺は抑え切れずに、内心大爆笑しながらボソッと悪態を呟いた

「ん？」

何か言ったか、人間？」…聞こえていたらしい

俺は愛想笑いを浮かべながら、『何でも無いですよ』と言うしかなかった

俺はほんの十数分前までこの演習場をさ迷っていた

整地もられておらず、不安定な山道を黙々と歩いていた

すると人影を発見したんだよ

まあ、対抗部隊だったら死亡扱いになるかもしれんが…このまま迷子の兵隊続けるよりずっとマシだろ

近付いてみると正体はこの古めかしい着物を着た三人の民間人だった

9

で、俺はさつきからずっと絡まれている訳だ
っーか、何で演習場に民間人いんだよ？

「失礼しました

あの、自分は第54普通科連隊の『マトバゼン的場善路』士長と言つ者です

ここは防衛省所有の演習場でして…民間の方の出入りは原則禁止されております」

分かるだろ

俺は『家に帰ってくれ』って言ってるんだ

俺は迷子なの

迷える子羊なの

あんたらの妖怪ごっこに付き合ってる心の余裕はないんだよおお！

だが…

三人の民間人は互いに首を傾げ合うと、『何言ってるんだ、こいつ？』とばかりに失笑し始める

「この人間…何言ってるんだ？」

「きつと毒茸でも食っておかしくなっただんどう？」

「ああ、何か服もおかしいしな…」

すると今度は俺の服を指差して笑い出す

「ラリってんのはお前らだが……」

「何が可笑的い……！！！」

「やっちゃった」

俺はとうとう声を張り上げて怒鳴る

三人はぴたりと笑うのを止めると、露骨に嫌悪感を顔に出して睨んで来る

その表情が更に俺の神経を逆なでする
相手は民間人だ

勿論、本来は守るべき人達だがこれは酷いだろ

こっちが本気で頭下げてんのによ…

また怒鳴りたい衝動を何とか殺し、出来るだけ落ち着いて、しかし毅然とした態度を保ちながら再び口を開く

「……大声をあげて申し訳ありませんでした

ですが、ここは演習場です

一応戦闘が行われている為、危険が無いとも言いきれませんが……」

ゆっくり…

言葉を選びながら、彼等に近付く

そして、移動を促す様に先頭にいた民間人の背中を軽くさわる

「……………るな」

すると彼は顔を伏せ、まるで絞り出すような小さな声で言った

『触るな』…と

おーおー
怒ってる

彼は両腕の血管が浮き出る程、力を込めて震えていた

「はいはい
力んでもダメ、早く家に帰って下さい」

……まあ、完全に下手に出れないあたり、俺もまだまだガキなのだろう

そんな事を思いながら、彼の背を軽く叩いた

すると彼は二、三步ふらついたあと、まるで親の敵でも見るような目付きで睨んでくる

まあ、体格も身長もえらく小柄な為、まったく怖くないが…

俺は残りの二人に向き合う

「さ、貴方達も早く帰って下さい」

ぶっちゃけこれで駄目なら力付くで連行しようと思っていた

さて、二人の口から出るのは罵倒か、それとも妖怪流（笑）の皮肉か…

取り合えず協力的な反応では無い事を予測していた

しかし

「あゝあ……

大人しく消えていれば腕一本喰らうくらいで許してやったのに……」

「まったくだ、人間

お前は本当に無知なのか？

はたまた、イカれているのか……それとも蛮勇か……」

『可哀相に……』

は？

二人は一樣に頭を垂れると、何と言つか……同情？
してくれてる様な雰囲気醸し出している

てゆーか、無知かイカレか蛮勇って何だ？

俺？

俺がその三択の中に当てはまるってのか？

クソ失礼だろ

もういいや

ストレス溜まるだけだし、実力行使だ

引きずってでも追い返してやる

俺は意を決して足を半歩前に踏み出す

ああ、でも俺も迷子なんだよな…

仮に彼等を捕まえたとしてどうすればいいんだろうか…

一瞬そんな考えが頭をよぎる

故に俺の目は彼等を捕らえておらず、やや泳いでおり、一挙一動に迷いがある

要するに俺の動作は緩慢だった

だが…それを言い訳にするつもりは無い

また、仮に俺の心に余裕がある状態だったとしても俺は同じ様に吹っ飛ばされていただろう

.....

.....

ドゴオオオオオオオオオン！！！！

ははっ、早速殺りやがった！

先程まで、珍妙な格好で馴れ馴れしく我々に意味不明な説教をたれて来た人間は、轟音と共に目の前の藪へ消えていた

あの人間……（マトバとか言ったか？）の耳障りな声は掻き消え、今は鳥の囀りと……

「はあ、はあ……あ、あの人間」

『人間』を殴り殺した俺の仲間の荒い呼吸音だけだ

そう……

あの人間はこいつに殺されたのだ

人間と妖怪の腕力差は歴然

今頃、あの人間は臓物を撒き散らしながら挽き肉になっている事だろう

良い気味だ

最近、人間は調子に乗っている

我々への『畏怖』が薄れているばかりか、あの博麗の小娘が提案した『お遊び』に感化され我々と対等になったきでいる

気に入らない…

何とおこがましい事が…

…だから

ちゃんと身の程を弁^{わか}まえて貰わないと

…しかし、妙だな

こいつ、あの人間を殺してから微動だにしない

呼吸は更に荒くなり、顔色は真っ青だ

……博麗を恐れてるのだろうか？

確かに、これは人間からしてみれば立派な異変であり、事によっては博麗が動く事も有り得る

可哀相に…

不安なのか

俺は一步踏み出すと、背中を軽く叩いてやる

「大丈夫だつて

人一人、俺達で食つちまえば証拠は……………

……………な……………に……………？」

俺はこいつが右手…

つまり、あの人間の腹を殴った自分の右手をじっと見ている事に気が付く

俺の言葉を見無視し、ずっと見ているのだ

無論、俺の目もそっちに向かう

すると、そこには…

あゝ、その、そこには……

何と言えば良いんだろうか？

いや、別にこいつの右手が分裂して30本になったとか…そう言う訳の解らない事態では無い

だが『有り得ない』

今までの流れで、一体何が起こればこの様な『惨事』になるのだろうか？

「……お、お前

その腕は、一体…！？」

半歩…また半歩

俺はタララを踏みながら後退する

「なあ…痛てえ、痛てえよお…」

ついに、こいつは右手を庇いながら涙を流し始める

こいつが嗚咽で肩を振るわせる度に、血が地面にシミをつくる

こいつが痛みで右手を庇う度に、皮膚を突き破り折れた骨が露出する

俺ともう一人の連れは顔を見合わせると、我に帰りこいつに近寄った

「だ、大丈夫か!？」

取り合えず此处から離れよう…

そう思い、こいつの肩を抱いた…

その時

「待　　て」

聞こえるハズの無い声がした

死んだはずの…殺したハズの人間の声がした「ひっ!？」

その人間の姿を見た瞬間、こいつはへし折れた腕を必死に庇いながら後退りする

俺ともう一人の連れは、庇う様にこいつの前に立ち塞がる

人間はただ半身の体勢でひざまずいている

信じられ無いことだが……あの攻撃が効いた様には見えない

そして一番腑に落ちないのは、本当に『突っ立っているだけ』……と言う事

憤る訳でもなく、逃げるわけでも無く……反撃する様子も無い

人間の左目は眼帯がされており、右目のみでただひたすらに、俺達を睨んでいる

いや……俺達を見ている事すら疑わしい

反応が無い

感情が見えない

何を考えているか解らない

邪魔な草木を必死に薙ぎ倒しながら前進するも、腹部に感じる受け所不明のダメージに顔をしかめる

クソ…落ち着け、俺

トレースだ！

本日二度目の記憶トレースで何故俺が藪の中で地面にキスしてたのか推理するんだ！

……等と内心テンパリまくりながら進んでいる内に藪から抜け出すと、そこで何故か青い顔でうずくまっている、例の三人を発見した

……そうだ、そうだよ！！

俺は彼等を帰そうと説得していた所、腹にスゲー衝撃を感じたんだ
それでそのまま藪へ吹っ飛ばされて行っただよ

ナルホド

そう言う訳だったのか……うん

どう言う訳だあああああああ！！！！？
分かるかボケ！

俺は自分の思考に本気でツツコミをいれる

だって人一人…俺の場合は装具や武器含め100Kgはある質量が
数メートルも吹っ飛ばされるか！？

飛ばねえよ！

……と言うことは、あの三人が何かしたに違いない

俺は心の中で何度も悪態をつきながら、防弾チョッキを撫でる

そこは、若干だが確実に凹んでいた

陸上自衛隊の防弾チョッキに入っているのはケプラーでは無く、強
固で一枚約6Kgある鉄板

それが凹まされるとなると……410番口径の散弾銃でも食らった
のかもしれない

俺は身を低くし、被弾を避けるため片膝について身構える

そして、例の三人に声をかける

「待…ゲフツ…て…ゴフツ…」

……腹が…

俺は『待つて下さい』と懇願しようとしたが、ダメージを受けた腹のせいで何とも間の抜けた咳を台詞と共に吐き出した

あゝ、ちゃんと聞き取ってくれたか若干不安だが、当の本人達には問題無く聴こえたらしく、スゲー勢いで俺の方に顔を向ける

しかし、気になるのは彼等の様子だ

まるで幽霊でも見たかの様に顔面蒼白、口をパクパクとさせている
更にそのうちの一人については尻餅について……ん？

「っ！」

俺は尻餅をついた方の右手に視線を奪われる

い、一体どうしたというのか！？

彼の右手は無惨にへし折れ、地面には突き出した骨から滴るどす黒い血で水溜まりを作っていた

グロッ！

酷い…一体何が！？

俺は彼等に向かい、駆け出そうと腰を浮かした

が、寸前で思い留まる

よく考えてみる…

そう自分に言い聞かせながら防弾チョッキの凹みを指でなぞる

俺が吹き飛ばされたのと、彼が大怪我をした理由を考えてみる…

俺は背中に垂れる嫌な冷や汗と、つま先から虫がはい上がって来る様な焦燥感を無理矢理押し殺し頭を働かせる

その間は、俺にとっては正に永遠

視線はたえず動き、全ての視覚情報はカットされ、ひたすらに『思考』に専念する

そして、俺は一つの結論にたどり着く

その間、わずか数秒
だが…想定外の事態に晒されながら頭を酷使した為、体感時間は数十分

そんな極限で生み出された答え

それは…

どこかに狙撃兵がいる！！

間違いない

目の前にいる彼等は俺を吹き飛ばせる程の装備を持っていなかった
犯人は彼等では無い

現に内一人は重傷を腕に負い、涙を流しながら怯えきっている

つまり彼は腕を『狙撃』されたのだ

しかし…何故陸上自衛隊の演習場に！？

…ああもう！

冷静になるんだ！！

こんな所にリアルエネミーが居るはずねえ！！

となると…やはり

「はあ、やっと終わったわ…」

私は年季が入りすぎて枝が擦り切れた竹箒を杖代わりすると、軽く溜息をついた

この時期、桜はとうの昔に散りきっており、たかが境内の掃き掃除でうつすら汗をかく始末

霜月（11月）の終わり頃は寒さに震えながら枯れ葉をかき集めていたと言っのに…

「時間が過ぎるのは早いものね」

……等と愚痴りながら先程集めた落ち葉を見つめた

それにしても…暑いわねえ

私は誰も居ないのを良い事に、膝丈よりやや短めの袴の端を掴むとパタパタとあおぐ

「あゝ、涼しい

こう言う時、女って便利よねえ

ま、小使時の利便性を求めるなら引き分けかしら？」

汗が引くまでやろう…どうせ参拝客なんて来ないし

此処、博麗神社は客が来ない

全く来ない

マジ来ない

問題は人里との距離が離れており、おまけに道中には妖怪がかなりの頻度で出没する

おかげで寶錢箱は年中すっからかんだ

つか、初代博麗（ご先祖）よ

もうちょっと、良い立地条件はなかったの？

「博麗大結界云々より、子孫が餓死するわよ…」

私は誰に言うでもなく呟くと、再び袴で風を送る

その時…

「はぁ、はしたない…

楽園の巫女の名が泣くわよ、靈夢？」

声が聴こえた

それも聞き慣れた声だ

私は『無駄』だと分かりつつも辺りを軽く見渡す

だが、声の主を見付ける事は出来ない

まあ、おそらくまだ『スキマ』の中だからだろう

「はん？

発汗の不快さを知らないからそんな悠長な事いつてられんの

つか出て来なさいよ、紫」

私は何も無い空間に適当に声をかける

すると再び声が返る

「いえ、遠慮させて貰うわ」

…おかしいわね

いつもなら勝手に上がり込んで、お茶啜ってるのに

「あら、紫にしては殊勝じゃない
てか、何しにきたのよ？」

私は皮肉混じりに、そう言い放つ

すると声は、幾分落ち込んだ様子で返事を返した

「はぁ、時間がないのよ
今回の『異変』は厄介なんだから」

「異変？」

私は素っ頓狂な声と共に紫の言葉を反芻する

「そう、だから今回も宜しくね、霊夢」

変ね……別に異常は感じないけど…

まあいいわ、異変の解決は貴重な収入源だもの
面倒だけど……

「…分かったわよ

で、今回は何処のどいつをシバキ上げるの？」

私が自信満々に答えると、紫は何とも言えない苦笑いを返してくる

「んー、それ程単純な話しても無いんだけど…
とりあえず、『彼』を保護してもらいたいの

話しはそれからよ」

すると何の前触れも無く、目の前に一枚の紙がヒラヒラと舞い落ちて来る

私は乱暴にそれを掴む

と言うか、これは紙じゃ無い…

「写真？」

…てか、何こいつ??」

その写真に写っていたのは一人の男

「彼は『的場 善路』

外人だよ

私がスキマで拉致つたの」

この妖怪はタチの悪い事に結界外の人間をスキマを使ってこの隔絶された楽園…幻想郷へと連れ込む（勝手に）癖?…みたいなものがある

「『拉致つたの』じゃないわよ
酔狂も程々にしときなさい」

等と口先だけで文句を垂れてみる

が…しかし、私の視線は写真の人物に釘付けになる

…別に私がこの人物に色気づいているわけではない

顔立ちは端正な方だが、二枚目と言うには無理がある

佇まいに気品溢れると言うわけでもない
たたず

指を二本立てる変わりに中指を立てている事から、どちらかと言えば
……下品な印象を受ける

私が気になったのはその格好…もとい服装

「何、こいつ…」

本日二回目の台詞

いや、マジで『誰』じゃなくて『何』だから

写真の人物は泥だらけ汗まみれで、見たこともない緑と黒を基調と
した変な服を着て、左手に……あゝ、『細長い何か』を掲げている

ちなみに、右手は前記した『中指』だ

「彼、的場君が今回の異変の……いわば『キーパーソン』かしら」

き、きーぱー…

は？

「主要人物って意味よ

で、霊夢…貴方は彼をどう見るのかしら」

「どうと言われても…森に隠れたら見付けにくそうね
兵隊でもしてんの？」

特に考えて答えた訳でもない
ただ脊髓反射で答えただけだ

しかし、私のその適当な答えを聞いた紫は嬉しそうに笑っている

「ふふっ…半分正解

彼は『自衛官』だもの」 s i d e ・ s h i f t

s c e n e

『陸上自衛隊第54普通科連隊駐屯地・第98号舎3階・警務隊執
務室』

「お疲れ様でした、原田1曹」

「いえ……」

内開きの扉が開かれ迷彩姿の男が二人出てくる

此処が自衛隊駐屯地である事から分かるように彼等は自衛官である

彼等は互いに事務的な挨拶を交わすと、『原田』と呼ばれた男はそのまま回れ右をし、部屋から退出する

「やれやれ、参ったねこりや…」

もう一人の男は原田が完全に居なくなるのを確認すると、重い溜息をついた

そのまま自分のデスクに戻ると、数時間前に買った飲みかけの缶コーヒーを煽る

炭酸の抜けきったコーラは想像に違わずマズく、余計に彼を沈鬱な気持ちにさせた

「あ、お疲れ様です北村曹長!!」

聞き慣れた後輩の声…

男…北村はそれが自分に向けられているものだと思察すると、緩慢な動作で声の方を向く

「ああ、小森…」

全く、ホントに疲れたよ」

「……ですよね」

あの原田1曹って人、けっこう参ってましたよ」

いや、俺がな

……疲れのせいか、反論する力がわかん

北村は適当に話を合わせる事にする

「無理も無い、演習でいきなり部下が消えたと思ったら、今度は尋問紛いのめにあつたんだ」

そう言つて北村は、さつき自分と原田が出てきた部屋……『取調室』に目を配る

何故そんなものが有るかと言つと……此処は『そう言つ職種』だからだ

『警務隊』そう呼ばれている

いわば自衛隊の中の警察……と言つた所だ

我々とはある失踪事件を捜査しており、つい先程最後の取調が終つた所だ

その最後に取調べた人物が、失踪人物の分隊長『原田 信行』一等陸曹

「つたく、脱柵するなら分かりやすくしてくれよ『有名人』

『神隠し』だの……馬鹿馬鹿しい……」

俺は誰に言つても無く愚痴を吐き出すと、その『脱柵者』に感ずる書類を睨み付けた

この脱柵者が実にファンタジックな逃げかたをしたせいで、捜査は混乱している

そのままじつと書類を睨んでいると、小森が口にタバコを加えながら書類を手取る

「脱柵者『的場 善路』…階級『陸士長』
年齢は26歳……ん？、一選抜で『3等陸曹』に昇進？

……翌年、陸士長降格って…何やらかしたんですか、この人？」

小森は信じられない、といった風に口をあけると北村をみる

それもそのはず

『降格』自体重く、厳しい処分だ

しかも、兵を指導する立場の下士官（陸曹）からただの兵卒（陸士）に落されるなど、相当重い罪を犯したのだろう

しかし、小森の表情と打って変わって北村はポーカーフェイスのまま小森を見ると重い口を開いた

「ああ？

さっき言っ通り、こいつは…『有名人』なんだよ

勿論、悪い意味のな」「……………ああもう頭痛ええええ！！！！」

めんどくせえ！

俺は瞬時に思考を中断すると小銃をローレディに持ち替え、彼等に

駆け寄る

まあ、無策だし状況は何も改善して無い

ただそれは、あのまま長考を続けていても同じ事

まずは彼等を保護しようとする目の前の一人に手をかけた

その時…

「くたばれっ！」

俺は急いでのばした手を引っ込める

それと同時に右足を極限まで踏ん張り、自分のスピードを殺す

俺が止まるとほぼ同時に、目の前を拳が通過する

俺は拳圧を頬にモロ受けながら、後退する

「ちっ！」

例の民間人は舌打ちすると、更に一步踏み込み俺を追撃して来る

待て、何故俺が殴り掛かれなきゃならん！？

さっきから超展開ばかりでまったく事態が把握出来ない

「ちよっ、ちよっと待て！」

半ば懇願する様な形になった俺の言葉にもこの民間人は無視

目玉をひんむいて、俺に殴り掛かってくる

冗談じゃ無い！

こんな状況で民間人といざござなんか停職何ヶ月だ！？

だが…まあこのまま大人しくぶん殴られる謂れは無い
拘束してしばらく大人しくしていて貰おう

と、俺は本格的に戦闘体勢に入る
が…相手を捕らえきれない

どついう事だ？俺は右手で相手のパンチを捌くと、そのせいで痺れた右手を撫でる

ぶっちゃけ、こいつは素人だ

さつきからテレフォンパンチ連続している辺り間違いない

だが『抜けられる』のだ

手首返し、首捻り、更にはタックルで転がした後の腕ひしぎも……

全て『力づく』で回避された

第一、『パンチを捌いた手が痺れる』と言うのもおかしい話だ

つまり総じて考えると、この男、凄まじく力が強い様だ

見た目こそ中肉中背の青年なのだが…

しかし本気こそ出してないが、ほぼ完璧に決まっていた関節技を力のみで解除されたのは事実

それが何かの間違いじゃなければ、彼と俺には大人と子供程の力の差が有ることになる

……………マジか？俺は一気に距離をとると大声を出して牽制する

「待て！！」

何故自分を攻撃するんです！？

てか、その人の怪我を何とかしないと！！」

俺は一瞬だけ、複雑骨折を負った民間人チラ見する

彼はもう一人の民間人に介抱されながら目を閉じている

気絶？いや意識低下か、まずいな…視線を戻すと、俺と対峙している民間人は吐き捨てる様に俺に食ってかかる

「は？貴様のせいだろうが！！」

どんな妖術を使ったか知らんが……ありや妖怪（俺達）でも三日は治らんぜ！」

「いや、三日じゃ治んねえよ」

……しまった

つい地で突っこんじまった

ほら、何かすげえ睨まれてるし

しかし…

『妖怪』、か

その時、彼等の放った

俺が中二病だと馬鹿にしていた単語が掠める

「ちっ…」

馬鹿馬鹿しい、ナンセンスだ

俺は小さく舌打ちをすると、今まで遊ばせていた左手を構える

いいだろう

大人しく拘束出来ないなら、…制圧させてもらっ…！

………

………

クソがっ…！

何が『三日じゃ治んねえよ』だ
調子に乗りやがって…！！

俺はマトバに全力で肉薄すると、有りつたけの力を込めて腕を振りかぶる

それに伴い発生する、空気を切る爆音

その速度、十分

威力は十二分

この拳が当たれば、人間どころか鎧さえも粉々になり、自身のラストスperlをも超える必殺の一撃

『妖怪』と言う優等性を全面に押し出した、単純にして最も合理的な物理の暴力

俺の腕は正に凶器となり、マトバの体を射ぬかんとする

だが……

「ふっ！」

俺の拳は遥かに脆弱なはずのマトバの腕によってあらぬ方向へと軌道を反らされる

同じ物を5〜6撃マトバに放っているが、その全てを回避、防御されている

……俺とて人食いの妖怪

人里から迷い込んだ人間を同じ方法で殺った事は何度もある

だがこんな奴一人もいなかった

何故、何故だ！！

俺は内心愚痴りながら振り切った拳を戻そうとする

……が

「逃がすか！」

マトバは俺の腕を一瞬で掴む

それは酷く流麗な動作

これだ、この体術が一番厄介だ

これではまるで、『あの館の門番』の相手をしている様な……

等と思っていたその時

「オラアッ！！」

マトバのドスの効いた気合いと共に腹部に強烈な痛みを感じる

俺は驚愕のまま視線を自分の腹に向けると、そこにはマトバの膝が深く食い込んでいた

急いで距離をとろうと足掻こうとするも、マトバは前のめりになった俺の襟を掴む

奴はそのまま反転して俺を引きずり倒すと、俺の顔面に目の覚める様な突きを叩きこんで来た
まずい！

こうしている間にも俺の体はマトバによって不自然な体勢に固定されかけ、自由は確実に奪われつつ有る

俺は必死に手をバタつかせる

すると何とかマトバの手首を握る事が出来た

俺はしめたとばかりに全力をもってマトバの手首を握る

「っ、潰れる……」

……

……

「ぐっ、あ……！」

それは突然の出来事

驚愕と理不尽な事態に混乱しつつも、腕を襲う激痛に軽い悲鳴を漏らす

先程まで、間違いなく俺が有利だった

若干の罪悪感を感じつつも、この妖怪君（今、命名）の腹に膝蹴りを叩き込み引きずり倒した

そのあと、速攻で腕絡みを決めた

……までは良かった

妖怪君がいきなり手首を握ってきたのだ

いや、『握る』とか生易しいもんじゃない

俺の手首は早くも鬱血し指先の感覚が鈍くなり、骨はメキメキと不穏な音を立てている

いや、ビビったね

邪眼使いやどこぞの喧嘩士もビックリの握力

だがな……

「ギッ……が……さつさと離しやがれ、人間っ!!」

それに伴い俺の腕絡みの締めも強烈になって行くんだがね

……ってか、マジで何なんだコイツ!!

俺、普通なら健が切れる位の力で締めてんだけど!?

「ウギギギギギ」

「アガガガガガ」

二人揃って変な声が出た

何か、もうただの我慢大会になっている気がする

何やってんだ、俺？

だが、その時

「っ！

人間ごときに何てこずってんだ！？」

側方から声が聞こえた

俺はその声に青ざめると、あることに気が付く

（そう言えばこいつら、三人いたんだよ！）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4883s/>

東方武想録 ~ Find of the exotic people ~

2011年11月11日04時50分発行